

ても明かである。

今一、二、の例をあげて見る。

譬喩品と言へば三車火宅とすぐ思ひだすがはじめに火宅に一門ありと經典に出てゐるあの門に就てみると、まづ、太子の義疏には「門」とは是れ能く物を通ずるなり、言ふは長者の家、廣しと雖もそれ出づ可き者唯一の門あるは、三界は廣しと雖も爲由つて出づることを得るは唯一の聖教あるに譬ふ。而れども「門」には二用有り、一には能く内者を外に出し、二つには能く外者を内に入る。…中略…内合すれば、如來は菩薩たりし時には三界を離れずして、脩行し行滿ちて三界を出でて成佛したまへりと雖、而も衆生の五濁の爲に惱まざるを見て、亦大乘教を以て還つて三界に入り、衆生を教化して三界を出しめ給ふなり。とある。之を文句にみると、門又二あり、宅門と車門なり。宅は生死、門とは出要の路なり。此れ方便教の詮也。車とは大乘の法なり、門とは圓教の詮なり。とある。之は(一)は生死を出づる門、(二)は大乘圓教に入る門である。大乘圓教に入るとは衆生をして三界を出しむることであつて太子の理解

と同一と見ることが出来る。光宅が、今呼佛教爲門、但三界衆生反流之始會藉言教如來言教爲門然後出離生死必到菩提、然則五時言教爲門。と註解せるものとは異なる。文句は之の光宅の註を評して、單に教ふることを門とせば經を得る者衆し何の意ぞ出でざらん。と批判してある。之の外、門の燒失せることにつき、又三車の眞實と虛妄につき、或は、索車につき、太子と天臺の類似せる點は極めて多い。方便品については宗教研究百二十三號にその要點を載せたが、方便品に於て既に充分兩者の思想的一貫がみられる。そこから法華經に對する一つの客觀的理解が生れると思ふ。法華經のみならずあらゆる經典についても諸註疏の對比によつて一つの基本的解釋を與へることが必要ではないか。そこから所謂宗學といふものへの正しい批判が出てくるのではないかと思ふ。所謂歴史的相承や又著作上の傳承がなくとも或は場所を異にしつゝも一貫せる思想の流れるところに佛教本來の姿があるのであらう。

本願に於ける唯除の機について

美濃部薫一

曇鸞によれば五逆罪を具して謗法がなければ往生を許すが謗法者は往生の不生と論じ、更に善導は未造業の謗法を抑止し已造業の五逆を攝取してゐる。それは謗法そのものを抑止したのではなく、謗法の攝取について抑止と言はれたのであつて、そこに謗法の罪とが知らしめその廻心を促してゐる。是を通し宗祖は本願の唯除逆謗の眞意を涅槃經の難治の機と明して、その機は本願醍醐の妙薬によつて治すると明されてゐる。涅槃經によれば謗法の救ひは謗法者をして菩提心を發さしむるにあつて、その菩提心を發すといふ所に眞の廻心懺悔がある。それ故そこに廻心はただ一度びあるべしと言はるる所以がある。

茲に於て本願に唯除された難治の機が救はれる道は却て如來の本願以外にはなく、唯除の自覺こそ本願のむ機である。随つて法藏は至心信樂欲生と十方衆生をすすめて若く不生者不取正覺と誓はれ

た時、彼が願心自體の内面の窮極に於て逆謗の衆生を見出されたが、我等は是に觸るる時二種深心に徹する。蓋し善導が本願加減文に懇々三信と唯除文を減じて、それを二種深心として明されたことは願に於ける信（機）の自覺を物語るものであらう。

さて抑止文は不取正覺の後にあるを以て彌陀の本願でないと云ふ説もあり、或は又、梵文西藏文には不取正覺の前にあるし、宗祖も曇鸞も本願の文、成就の文を引く時は必ず抑止文を切り捨てずにみて居られる故に本願であるといふ説も成り立つ。されど口傳鈔に「抑止は釋尊の方便、眞宗の落居は彌陀の本願にきはまる」とあり、六要鈔にも抑止文が不取正覺の外にあるを以て釋尊の抑止とみてゐる。是を以て涅槃經を案ずるに無根の信を獲た大王が偈頌を以て「實語甚微妙」と嘆じてゐる。か様に釋尊の實語と嘆じられてゐる所を推してみるに、唯除は正しく釋尊の抑止である。かく見てくると唯除文について悲華經を思念せざるを得ぬ。悲華經は大經とは系統を異にするが、大經に對抗して釋迦の因位としてそ

の大臣の寶海梵士がいはいはれ、寶藏如來のみもとに五百の大願を發して、逆謗の阿鼻地獄に墮すべき者に對し釋尊自ら代つて地獄の苦を受くと言ふ善巧方便が語られてゐる。これ正しく本願を深化したものと云へよう。

抑々宗祖の自覺道は凡聖を包んで十方衆生と招喚し給ふ本願によつて、諸有衆生と迷える凡夫の往生の道を見出し、更に唯除の思召しによつて本願の正機は罪人に限ると次第に限定してゐる。そこに宗祖は唯除逆謗を親鸞一人の問題とし、謗法と言ふ自己の自覺の上に十方衆生の本願を頂かれた。されば唯除逆謗こそ本願を開く門である。か様に宗祖は善導の未造の謗法を抑止するといふ誠めの相を自覺的にとらへ、而も謗法を内面化して二十願の佛智疑惑の罪を見出された。唯除逆謗は二十願を以て知らるる。二十願は如來の廻向に觸れた懺悔道であり否定道である。斯様に宗祖は本願を自己限定して機の二十願を見出すと同時に法の十七願を見出された。而もこの二願は互に逆對應的に深い關係がある。されば絶對否定、自力無效と言ふ機の自覺の徹底は

諸佛の歴史的な教の鏡に照されてのみ可能であり、法の歴史に觸れてのみ人間を超えて人間の分限を自覺し人間の獨立を可能ならしめる。この自覺に觸れた身分は眞の佛弟子であり、内容は横超斷四流であるが、宗祖はこの眞の佛弟子に對して假や偽の佛弟子があるとし、「悲しき哉や愚禿鸞」と釋をとり、「定聚の數に入るを喜ばず」と表白されたことは二十願に於ける内面的な機の痛みと窺はれる。而もこの自覺は實存主義の如き自己を否定しても否定する自我の暗影はなく、悅服して墮獄の宿業を頂ける道である。げに唯除の機は汝として召されたる自己である。

宗祖の歴史意識と

人間の實存

山本 正文

一、鎌倉佛教は末法史觀との對決であつたと云はれるが、宗祖の教學も勿論末法史觀との對決に於て成立してゐることは云ふまでもなく、「教行信證」と言ふ題目そのもの或は化卷及後序の文によつても明かである。更に、御本書に於ては